

第39回 高知女子大学看護学会 講演会

「ナラティブ・アプローチの可能性」

東京女子医科大学看護学部 教授

田中 美恵子



おはようございます。東京女子医科大学の田中と申します。畦地先生、ご紹介、ありがとうございました。高知女子大学看護学会にお招きいただいてとても嬉しく、また光栄に思っております。私は高知女子大学とはご縁が深く、聖路加看護大学で修士課程の時には南裕子先生にお教えいただき、教育だけでなくその後一緒に働かせていただいて様々なことを教えていただいております。また、博士課程では、中山洋子先生に博士論文のご指導をいただいて、高知女子大学の看護教育の伝統があって、今の私がいると思っております。ですので、勝手に高知女子大学の同窓生だと自分では思っております。そこで、私としては今日、とても光栄に思いまして、また、楽しくお話をさせていただければと思います。

今日は、ナラティブ・アプローチの可能性ということでお話をさせていただきますけれども、私の話だけでは退屈と思いましたので、随所に、私が5年ほど前に精神保健の国際学会でギリシャに行った時の写真を入れさせてもらっています。



さて、ナラティブ・アプローチというのは、様々な学問分野の壁を越えて、多くの人々に知られるようになってきています。医療、看護、心理、福祉、様々な臨床領域で、実践方法として、また、社会学や人類学など新しい研究方法として、さらに、組織経営の新たな手法などとしても用いられています。医療、福祉分野、そして看護の中で、今後ますますナラティブ・アプローチが注目を浴びてくるのではないかと思います。

ナラティブ(Narrative)とは？

日常生活におけるナラティブですが、私たちの日常生活を振り返ってみますと、ナラティブで溢れ返っていることに気づかされます。テレビでは、毎日、ドラマとかアニメとか、様々な物語が繰り広げられています。その他には、私たちは小説を読んだりもしますし、映画館に行ったり、DVDで映画を楽しんだりとかもします。様々な形でナラティブが溢れているということがわかります。

今日一日思ったことや、最近の出来事を家族や友人に話す時も何らかの物語になっていると

思います。そして、歴史も人々の語りによって作られているという点で物語の一つだと考えられます。これはフランスの哲学者のRoland Barthesが言っている言葉ですが、「神話、伝説、寓話、御伽噺、小説、叙事詩、歴史、悲劇、ドラマ、喜劇、マイム、映画、ステンドグラス窓、絵画、映画、漫画、ニュース、会話、あらゆる年代、あらゆる場所、あらゆる社会にナラティヴは存在している。」と。「人類の歴史とともに始まった。そしてナラティヴなしの人々はいたためしがない。それは単純にそこにある。あたかも人生そのもののように。」とBarthesは言っています。

日常生活におけるナラティヴ

- ・ 神話、伝説、寓話、おとぎ話、小説、叙事詩、歴史、悲劇、ドラマ、喜劇、マイム、絵画、ステンドグラス窓、映画、漫画、ニュース、会話。
- ・ あらゆる年代、あらゆる場所、あらゆる社会に存在
- ・ 人類の歴史とともに始まった
- ・ ナラティヴなしの人々はいたためしがない
- ・ それは単純にそこにある。あたかも人生そのもののように。



Barthes

ナラティヴ理論というものですが、歴史的には古くて、アリストテレスの悲劇の研究あたりからルーツが辿れるようです。それからずっと後になって、近現代になってきまして、フランス構造主義、ロシア形式主義、ポスト構造主義、文化分析、ポストモダニズムなど、非常にたくさんの学問領域からナラティヴに関係した考え方が派生してきています。そして、現在では、非常に学際的な領域になっています。

ナラティヴ理論

- ・ アリストテレス: 悲劇の研究
- ・ フランス構造主義、ロシア形式主義、ポスト構造主義、文化分析、ポストモダニズム

から派生 ⇒ 学際的な研究



さて、「ナラティヴとは？」ということですが、野口先生の所から引用しておりますが、ナラティヴというのはジーニアス英和辞典では「(出来事・経験などに基づく)話、物語、談話」「(文章の会話部分に対し、作者が説明する)地の部分、地の文」などの意味があるそうです。その動詞形である「narrate」というのは、「出来事、経験などを(順序立てて)述べる、物語る、…の話をする」という意味があるそうです。具体性、順序などがその特徴であると言えます。邦訳ではナラティヴが「語り」、「物語」というように訳されていることが多いのですが、「語り」という場合には「語るという行為」、それから「物語」という場合には「行為の産物として語られたもの」という両方の意味が「ナラティヴ」という言葉の中に含まれるので、「ナラティヴ」とそのまま言われていることが多いようです。

ナラティヴ (Narrative) とは？

- ・ narrative: 「(出来事・経験などに基づく)話、物語、談話」「(文章の会話部分に対し、作者が説明する)地の部分、地の文」
- ・ narrate: 「出来事、経験などを(順序立てて)述べる、物語る、…の話をする」 (ジーニアス英和辞典)
⇒「具体性」「順序」
- ・ 邦訳: 「語り」、「物語」
「語り」: 「語る」という行為
「物語」: 行為の産物「語られたもの」
- ・ ナラティヴは「語り」および「物語」の両方を含む。
出来事や経験を語る行為およびその語られたもの
(野口, 2009, p.1)

最近、ナラティヴのことを勉強しようと思うと、引用にも書いてあるReissmanが、2008年に、最後の参考文献に載せてある「Narrative Methods for the Human Sciences」という本の第二版を出されています。その第一版もあるのですが、第二版が2008年に出されて、分厚くなっています。この人は、元々看護の出身の研究者のようですが、このナラティヴに関する本が、様々な学問領域の方、例えば、ナラティヴに関する本を日本の方が書いたものを読んだ時にも引用されているのを見るのがあって、とても幅広い分野の方から評価されている本だと思います。このReissmanが、ナラティヴは定義するのがとても難しく、非常に多様な定義があると言っているのですが、とりあえず最初に簡単に

言うとかいうことだと、書いてあります。ちょっと、これは、訳しづらくて翻訳が変なのですが、とりあえず読みますと、「日常の口頭によるストーリーテリングにおいて、話し手は出来事を順序立てる。それは後の行為を結果づけるためであり、また、話し手が聞き手に対してそのストーリーから取り出してほしい意味のためである。話し手が大事なものと認識する出来事が選択され、組織され、結びつけられ、そしてある特定の聴衆にとって意味ある物として評価される。」、こういうものをナラティブの本質として最初に述べています。

ナラティブとは？

日常の口頭によるストーリーテリングにおいて、話し手は、出来事を順序立てる。それは後の行為を結果づけるためであり、また、話し手が聞き手に対して、そのストーリーから取り出してほしい意味のためである。

話し手が大事なものと認識する出来事が選択され、組織され、結び付けられ、そして、ある特定の聴衆にとって意味あるものとして評価される。

Reissman, 2008, p.3

ここまでのことをまとめると、ナラティブというのは、「出来事や経験の具体性や個性性を重要な契機にして、それらを順序立てることで成り立つ言明の一形式」、「我々の生きる現実を組織化するための重要な形式」と言えます。そして、「出来事や経験をナラティブの中に位置づけることで、世界は了解可能なものとなる」、つまり、私たちはナラティブを通して世界を理解するという考え方をします。

ナラティブとは？

・出来事や経験の具体性や個性性を重要な契機にして、それらを順序立てることで成り立つ言明の一形式

・我々の生きる現実を組織化するための重要な形式

・出来事や経験をナラティブの中に位置づけることで、世界は了解可能なものとなる

野口、2005

これは、Whiteが、「ナラティブとは」ということと言っている言葉ですけれども、「人間は

解釈する生き物だと提唱しているのです。つまり、私たちは人生を生きる時、自分たちの人生を積極的に解釈しているということです。明瞭ななんらかの枠組みに頼ることなしには経験を解釈することはできないと提唱することでもあります。また、ストーリーがこの枠組みを構成していると提唱することにもなります」と言っています。

ナラティブとは？

・「人間は解釈する生き物だと提唱しているのです。つまり、私たちは、人生を生きる時、自分たちの人生を積極的に解釈しているということです。明瞭ななんらかの枠組みに頼ることなしには経験を解釈することはできないと提唱することでもあります。・・・またストーリーがこの枠組みを構成していると提唱することにもなります。」

(White, 1995, 小森訳, 1999)

ナラティブ、語り、または物語というものの最小限の要件は、「複数の出来事が時間軸上に並べられている」ということ、そのときの「思い」や「感情」も含まれるということ、そしてこのナラティブはストーリーの上位概念であります。ストーリーというのはナラティブに「プロット」が加わったもので、意味を伝えるという役割を果たします。このプロットというのは筋立てのことで、複数の出来事の関係のことを言います。この時、常に語り手と聞き手の関係、場面、文脈が反映されていきます。

ナラティブ(Narrative)とは？

・ナラティブ(語り・物語)の最小限の要件:「複数の出来事が時間軸上に並べられている」

そのときの「思い」や「感情」も含まれる。

★ストーリーの上位概念

・ストーリー:ナラティブに「プロット」が加わったもの
⇒意味を伝える

プロット(筋立て):複数の出来事の関係

語り手と聞き手の関係、場面、文脈が反映

(野口, 2009, p.1~25)

野口先生が紹介していることですが、学習心理学の中にナラティブを取り入れた学者であるBrunerは、私たちは、普通ものを話していると

きに、「ナラティブ・モード」と「論理科学モード」という2つのモードを、使っていると言っています。「ナラティブ・モード」というのは出来事の時間的連鎖を伝えますが、その必然性は確定できないという特徴を持ちます。人が多様な可能性に拓かれた存在であることを「ナラティブ・モード」は示すものです。もう一つ「論理科学モード」というのは法則とかがそれに当たるのですが、複数の出来事の必然的關係・因果関係を明確に伝えるもので、こちらの場合は、人が何らかの法則の下に生きる存在であることを示しています。私たちはこれら2つのモードを使い分けながら、語り、生きていると言えます。

ナラティブ・モードと論理科学モード ーナラティブの形式的特徴ー

- ・ **ナラティブ・モード**: 出来事の時間的連鎖を伝えるが、その必然性は確定できない。
⇒人が多様な可能性に開かれた存在であることを示す
 - ・ **論理科学モード**: 複数の出来事の必然的關係・因果関係を明確に伝える。
(ex. 法則)
⇒人が何らかの法則のもとに生きる存在であることを示す
- 私たちはこれら2つのモードを使い分けながら、語り、生きる。

Bruner, 1986, 野口, 2009, p.1~25

今度は、「ナラティブが伝えるもの」ということで、ナラティブの内容的特徴ですが、まず、ナラティブには3つの内容的特徴があると言われています。1つは時間制で「生きられた時間」を他者に伝えること。それから、「意味性」。プロット(筋立て)を得ることで、意味を伝えること。自分にとっての意味、他者にとっての意味。ただし、聞き手側の想定や文脈によってこの意味は変化する。それからもう一つ、「社会性」ということで、語り手と聞き手の共同作業によって成り立つ社会的営為であるということ。この3つの特徴がある。そして、「社会性」は聞き手が誰であるかによって変化する。そして、聞き手の関心や知識、聞き手の反応が影響を及ぼす。聞き手として誰が想定されているかも影響を及ぼす。自分だけしか読まない日記であるとかブログであるとか、最近だったらフェイスブックであるとか、色々あると思うのですが、誰が聞き手であるかということも1つ。そして、時

間的流れや出来事の意味を他者に伝え共有するための道具が、ナラティブであると。私たちの生きる現実にはナラティブによって構成されているという認識を持つことがナラティブ・アプローチのベースにあります。

ナラティブが伝えるもの ーナラティブの内容的特徴ー

1. 時間性: 「生きられた時間」を他者に伝える
2. 意味性: プロットを得ることで、意味を伝える。
自分にとっての意味、他者にとっての意味
⇐ただし、聞き手側の想定や文脈によって変化
3. 社会性: 語り手と聞き手の共同作業によって成り立つ社会的営為
聞き手が誰であるかによって変化。
聞き手の関心や知識、聞き手の反応。
聞き手として誰が想定されているかが重要
ex. 日記、ブログ

☆時間的流れや出来事の意味を他者に伝え共有するための道具
☆私たちの生きる現実にはナラティブによって構成されている
という認識⇒ナラティブ・アプローチ

Elliot, 2005, 野口, 2009, p.1~25

ここまで「ナラティブとは？」について、様々な定義や考え方を示してきましたが、では、「ナラティブ・アプローチとは？」ということになりますと、これは「ナラティブという形式を手掛かりにして何らかの現実接近していく方法」と言うことができます。この場合は、研究対象ではなく研究方法により定義されます。実践に使う場合もありますので、その場合は実践のアプローチの方法というのが、ナラティブであるということになります。ナラティブそれ自体が研究目的ではなく、何らかの対象に働きかける実践をする際に、ナラティブという形式を手がかりにするということがポイントです。

ナラティブ・アプローチとは？

- ▶ ナラティブという形式を手がかりにして何らかの現実接近していく方法
- ▶ 研究対象ではなく研究方法により定義される
- ▶ ナラティブそれ自体が研究目的ではなく、何らかの現象を研究したり、何らかの対象に働きかける実践をする際に、ナラティブという形式を手がかりにする。

(野口, 2009)

ナラティブ・アプローチの考え方ですが、視点の重層化、相対化、それから役割や立場に基づく異なる視点の当事者(患者、家族、医療者など)によって、異なる様々な視点や、そこか

らの事実によって現実が構成されているという考え方をベースに持っています。これは、「社会構成主義」に基づく考え方ですけれども、「社会構成主義」についてはまた後で詳しくご説明しますが、とりあえず、ナラティブ・アプローチはこのような特徴を持っていて、その理論的基盤が「社会構成主義」にあるということをここでは押さえたいと思います。それから「対話のプロセスを繰り返して掘り下げる」というところもナラティブ・アプローチの特徴で、患者様と意思決定を一緒にしていくという場面でも、意思決定に至るまで様々な角度から対話を重ねるという考え方が基本になります。

ナラティブアプローチの考え方

・視点の重層化、相対化

役割や立場に基づく異なる視点の当事者（患者、家族、医療者など）によって、事実が構成されていると考える。（社会構成主義）

・対話プロセスを繰り返して掘り下げる

意思決定に至るまで対話を重ねる。

「ナラティブ・アプローチとは？」と言うとき、もう一つ「本質主義」と「構成主義」という考え方があります。「本質主義」は、ナラティブに何らかの本質が隠されていると考える立場で、個々のデータは何らかの本質を表すと捉えます。例えば、グラウンデッドセオリー・アプローチで、ナラティブデータを使う時がありますが、その場合、「本質主義」の方に括られるようです。それから、「構成主義」は、「社会構成主義」と関連しているのですが、個々のナラティブが結果としてどのような現実を構成しているかを問う、ということで、この場合は機能分析に属することになります。後で、この部分は、具体例でお話していきます。この「構成主義」の場合にはナラティブと何らかの現象との関係に焦点を当てていきます。インタビューのプロセス自体をなんらかの現実を構成するプロセスとして捉える。既にインタビューをさせていただく対象者の方が何かの現実を持っていて、それを調査者が聞き出すという考え方では

なくて、インタビューのプロセスの中で、新たに現実、リアリティーが構成される、そのプロセスを重視するという考え方があります。語り手と聞き手が共同していかにより新しいナラティブを生み出せるか、というところが重要になってきます。例えば、この方法の一番積極的な形というのはアクティヴ・インタビューというもので、インタビューという状況の中で語り手がどのような現実をどのように構成していくか、そのプロセスの方に最も重点をおいて研究を行うものがアクティヴ・インタビューです。

ナラティブ・アプローチとは？

ー本質主義と構成主義ー

・本質主義：ナラティブに何らかの本質が隠されていると考える立場
個々のデータ：何らかの本質を表すと捉える
ex.グラウンデッドセオリー・アプローチ

・構成主義：個々のナラティブが結果としてどのような現実を構成しているかを問う。＝機能分析
ナラティブと何らかの現象との関係に焦点。
インタビューのプロセス自体がなんらかの現実を構成するプロセスとして捉える
語り手と聞き手が共同していかにより新しいナラティブを生み出せるか
ex.アクティヴ・インタビュー：インタビューという状況の中で、語り手がどのような現実をどのように構成していくかに焦点

（野口，2009）

ナラティブ・アプローチというのは実践という目的にも、研究（分析）という目的にも使えます。実践ではナラティブ・セラピーという家族療法の方法の中でよく使われます。それから研究は広くはナラティブ分析というように全体を言いますが、ライフヒストリー研究、ライフストーリー研究なども、ナラティブ・アプローチの研究として括られるかと思います。

ナラティブ・アプローチとは？

「実践」という目的にも、
「研究（分析）」という目的にも
使える。

実践：ナラティブ・セラピー
研究：ナラティブ分析、ライフ
ヒストリー、ライフストーリー



（野口，2009）

ここまで、いくつかナラティブに関連して基礎的な概念などを最初にご説明しておいた方がいいかと思います、ずっと話をしているのです

が、その中の1つとしてナラティヴの中で特有の言葉の使い方がいくつかあるので、それをご説明していきたいと思います。まず、ナラティヴの形式的種類ということですが、それには、Lyotardが最初に言ったと言われている「大きな物語」と「小さな物語」という言葉や、それからお聞きになったことがある方も多いと思うのですが、「ドミナント・ストーリー」と「オルタナティヴ・ストーリー」という考え方や、それから「ファースト・オーダー」と「セコンド・オーダー」という考え方、それから「語り手」・「主題」・「聴き手」による分類の仕方などがあります。

ナラティヴの形式的種類

- 1.「大きな物語」と「小さな物語」(Lyotard,1979)
- 2.「ドミナント・ストーリー」と「オルタナティヴ・ストーリー」
- 3.「ファースト・オーダー」と「セコンド・オーダー」
- 4.語り手・主題・聴き手による分類



まず「大きな物語」と「小さな物語」ですが、この「大きな物語」というのは、様々な物語を背後から正当化する物語ということで、特に近代でありましたら奴隷解放とか解放の物語とか、進歩の物語というように、近代なら近代という時代全体を1つのストーリーとして考えた時に、どのように言うことができるか、どのように意味づけることができるかというような場合は、「大きな物語」となります。それから「小さな物語」は「大きな物語」の支え無しに成り立つ物語です。正当化とは無関係に、新しいアイデアを出すことそれ自体を目的とする知の在り方ということで、「大きな物語」の背景の中で正当化されるかどうかとは関係なく、全くそれまでの「大きな物語」とは違う文脈から新しいアイデアを出したりする、そういうものを「小さな物語」と言います。「大きな物語」がモダン、近代の考え方の主流になるとすると、「小さな物語」というのは、特にポストモダンの特徴とされています。つまり、様々な草の根運動と

か女性が権利を獲得するとか、参政権を獲得するとか、当事者の方たちが自分たちの語りを世に広く伝えて広めるとかいうように、今まで「大きな物語」の中では光を当てられなかったとか、あまり目にすることがなかったような「小さな物語」をどんどん語っていきましょうというような考え方とも連動しています。これがポストモダンの特徴ということになります。

1.「大きな物語」と「小さな物語」 (Lyotard,1979)

「大きな物語」:さまざまな物語を背後から正当化する物語

ex. 「解放の物語」「進歩の物語」

「小さな物語」:「大きな物語」の支えなしに成り立つ物語。正当化とは無関係に、新しいアイデアを出すことそれ自体を目的とする知のあり方
＝ポストモダンの特徴

それから「ドミナント・ストーリー」と「オルタナティヴ・ストーリー」ですが、「ドミナント・ストーリー」というのはある状況を支配している物語のことです。例えば、「夫は外で働き、妻は家庭を守る」とかというような今は変わってきてはいますが、何となく一般の人々の心を支配しているようなストーリーです。それに代わる「オルタナティヴ・ストーリー」というのは、それに代わって現れるストーリーのことで、例えば「夫婦がどう役割分担するかは、夫婦ごとに決めればよい」というようなことになります。自分がどういうストーリーで生きているかというのを自分が物語ることで意識して、そして、例えば家族療法のような場合でしたら、今まで自分が縛られていた「ドミナント・ストーリー」に代わる新たな自分のストーリーを、「オルタナティヴ・ストーリー」を確立することが治療的に目指されることになるわけですが、このようなことが、「ドミナント・ストーリー」とか「オルタナティヴ・ストーリー」という考え方ですね。ただし、「ドミナント・ストーリー」がどういうものであるのか、「オルタナティヴ・ストーリー」がどういうものであるかというのは、とても状況依存的なものです。

2.ドミナント・ストーリーと オルタナティブ・ストーリー

- ・ **ドミナント・ストーリー**: ある状況を支配している物語
ex.「夫は外で働き、妻は家庭を守る」
- ・ **オルタナティブ・ストーリー**: 代わりに現れるストーリー
ex.「夫婦がどう役割分担するかは、夫婦ごとに決めればよい」
* それぞれ状況依存的

Elliot, 2005



それから「ファースト・オーダー」と「セコンド・オーダー」ということですが、「ファースト・オーダー・ナラティブ」というのは個人が自分について語ったもの、自分が自分自身について語ったものが「ファースト・オーダー・ナラティブ」と言われ、「セコンド・オーダー・ナラティブ」は研究者などがある社会的世界を理解するために語ったものということになります。私が、博士論文で行ったことですが、精神障害を持っている当事者の方たちに話を聞いて、その方々の語りを自分でまとめたり、解釈したりという場合には「セコンド・オーダー・ナラティブ」ということになります。その場合、対象者は、ある社会的カテゴリーに属する人々であるということになります。その、ある社会的カテゴリーに属する人々の代弁ということになります。ただし、「セコンド・オーダー・ナラティブ」というのは常に研究でばかり考えられるわけではなく、例えば、アルコール依存症の方のセルフヘルプグループなど様々なセルフヘルプグループがありますけれど、あるセルフヘルプグループでずっと今までそこに参加されてきた方の語りから形成されて語り継がれているような語りがあったとすると、それを他の人が語り継いでくという時には、やはり違う人、つまり、第三者が前の語りを語り継ぐということで、やはり「セコンド・オーダー・ナラティブ」と考えられます。特に「セコンド・オーダー・ナラティブ」の場合ですけど、「コレクティブ・ストーリー」というような言い方がされる場合もあります。「コレクティブ・ストーリー」というのは、ある社会的カテゴリーに属する人々の語りを讀んだり、聞いたりした時に、「これはまさに私の物語だ」、「自分に共通する物語だ」

というように認識される物語が出て来たとき、これは「コレクティブ・ストーリー」と言われます。このような個人の物語とグループの物語が相互に影響し合いながら、全体として物語が常に更新していくというようなことをみることが出来ます。

3.ファースト・オーダーと セコンド・オーダー

- ・ **ファースト・オーダー・ナラティブ**: 個人が自分について語ったもの
- ・ **セコンド・オーダー・ナラティブ**: 研究者などが社会的世界を理解するために語ったもの
* 対象: 社会的カテゴリーに属する人々
- コレクティブ・ストーリー**:
「これはまさに私の物語だ!」 ある社会的カテゴリーに属する人々に共通する物語
⇒個人の物語とグループの物語が相互に影響し合いながら、更新。

4番目が語り手・主題・聴き手による分類ということになるのですが、これは「聞き手がだれか?」「主題がだれか?」という観点になります。ここでは5つに分けて解説していますが、あまり細かいところは必要ないかもしれませんが、①自分が自分について話すような自己物語とか、②自分が相手について、その相手に向かい二人称で話すような物語の場合、③自分が他人について、相手とは別のの人に話していくような三人称の場合（これは噂話になるのですが）、④他人が自分について話すのを聞く場合、⑤他人が他人について、自分に話す（いわゆる物語、ニュース、噂話）がこれにあたるのですが、こういった分類の仕方もあります。

4.語り手・主題・聞き手による分類

- ・ 聞き手がだれか? 主題がだれか?
- ①自己物語: 自分が自分について話す
- ②自分が相手について、その相手に向かい話す（二人称）
- ③自分が他人について、相手とは別のの人に話す（三人称: 噂話）
- ④他人が自分について話すのを聞く
- ⑤他人が他人について、自分に話す（いわゆる物語、ニュース、噂話）

今までのところはナラティブとは何なのかということや、ナラティブの考え方の特徴、ナラ

ティヴという考え方で基本的に使われる新しい概念についてお話してきたのですが、このようなナラティヴの考え方が、一最初アリストテレスあたりからナラティヴ研究が始まったということを冒頭でお話ししましたが、今のように次第に広まってきたというのにはどういう理論的背景があるのか、というのがこれからのお話です。それが、「ナラティヴ・ターン」と言われるものなのですけれど、これは解釈学的・物語論的転回と言われることもあります。これは1970年代終わりから1980年代に起こった言語論的転回です。さきほどお話ししましたReisemanなどは、様々な人の説を紹介して、1960年代のシカゴ学派、グラウンデッド・セオリーなどが生まれてくる母体となったシカゴ学派のあたりから、「ナラティヴ・ターン」が始まっているのではないかという説も紹介していますけれども、一般的には、1970年代終わりから1980年代に起こった言語論的転回のことを言います。「私たちが知り得るのは何らかの形のテキストであって、そのテキストの外部はない。テキストこそ現実であり分析の対象なのだと考える思想史・社会科学上のスローガン」、これを「ナラティヴ・ターン」と言います。また、それとほぼ同時並行して起こってきたナラティヴへの関心、それに引き続く1990年代以降の「世界を理解する方法」としてのナラティヴや言語活動への関心の高まり全般を指して「ナラティヴ・ターン」と言います。何か私たちが物を知るということをよく考えてみると、文字化された言葉、語られた言葉もそうですが、基本的にテキストとなっている言語を通してしか物を知ることができない、ということへの大きな気づきです。

ナラティヴ・ターン (解釈学的・物語論的転回)

1970年代終わりから1980年代に起こった言語論的転回:

私たちが知り得るのは何らかの形のテキストであって、「**テキストの外部はない**」。テキストこそ現実であり分析の対象なのだと考える思想史・社会科学上のスローガン。

それとほぼ同時並行して起こってきたナラティヴへの関心、それに引き続く1990年代以降の「世界を理解する方法」としてのナラティヴや言語活動への関心の高まり全般を指して言う。




「ナラティヴ・ターン」の中で大きな役割を果たした学習心理学者のBrunerが、「人々が生きて生活しているフィールドの文脈や状況、語りの相互言語行為による生成プロセス、当事者の立場から見た物語を重視する視点を特徴とする」というようなことを言っています。さきほどの多層的な、多重的な視点ということにも関係しているのですが、語りの相互プロセスを重視していくということが、基本的にずっと特徴としてあります。

ナラティヴ・ターン (解釈学的・物語論的転回)

人々が生きて生活しているフィールドの文脈や状況、語りの相互言語行為による生成プロセス、当事者の立場から見た物語を重視する視点を特徴とする。

Bruner



1980年代を過ぎて90年代に入ってくると、例えば、フランスの哲学者であるRicoeurが「物語的自己同一性」を、Brunerは1990年に「ストーリーを語る者としての自己」を、少し前ですが、スペンスが1982年に「歴史的眞実」に対する「物語的眞実」ということを言っていて、同時代的に、全く違う学問分野から、非常に似たような考え方、概念というのが出てきています。これは、「科学的な一元的現実とは異なる多元的で重層的な、その都度変化する口承的な現実をすくいあげようとする試みである」という特徴や、物語的思考様式、ストーリーテリングによる「物語的推論」の重視、それから、プロット化された物語的時間を前提とするというような特徴があります。それから江口重幸先生がおっしゃっているのですが、「病いは物語的構成を持ち、閉じられたひとつのテキストではなく、複数のストーリーの集積から構成されたものである」というように、これはGoodからの引用ですが、こういうような広く病いの語りにも及ぶような「物語的な自己同一性」、「物語により眞実を捉える」といったような考え方が出てきています。

ナラティブ・ターン (解釈学的・物語論的転回)

リクール(1990):「物語的自己同一性」
ブルーナー(1990):「ストーリーを語る者としての自己」
スペンス(1982):「歴史的眞実」に対する「物語的眞実」

☆科学的な一元的現実とは異なる、多元的で重層的な、そのつど変化する口承的な現実をすくいあげようとする試み
☆物語的思考様式、ストーリーテリングによる「物語的推論」の重視、プロット化された物語的時間を前提
☆「病いは物語的構成を持ち、聞かれたひとつのテキストではなく、複数のストーリーの集積から構成されたものである」(Good, 1994, p.164)

江口

これが病いの語りへの注目となってきますと、医療の定式化された物語には収まりきらない、個性性、独自性を主張した「個人的な経験」、「病いの語りへの着目」ということにも及んでいきますし、医療人類学では臨床場面における「疾患disease」と「病いillness」との区別というようなことがKleinmanから始まってきます。この場合、疾患というのは、ご存じのように、医療専門職が医療モデルに従って、病気を外側から再構成するもので、一方で「病い」というのは患者や家族、また、当事者にとっての、内側から経験されたものを指しています。そして、「人間の病いは基本的に意味論的な、意味を持つ物であり、すべての臨床的実践は本来的に解釈を伴った、解釈学的なものである」とGood and Goodが言っているのですが、病いの意味や、語りに対する注目ですね。それから、その下に書いてあるのは『傷ついた物語の語り手』という翻訳が出ていますFrankが言っていることですが、「聴き取ることのエチカethics」、「語りー聴き取るという(ものすごく)単純な(素朴な)やりとりの中に人間の社会を構成するエチカ、その倫理的な原基を認めようとする」ということをいっています。

ナラティブ・ターン (解釈学的・物語論的転回)

☆医療の定式化された物語には収まりきらない、個性性、独自性を主張した「個人的な経験」(病いの語り)への着目
☆医療人類学:臨床場面における「疾患disease」と「病いillness」(Kleinman, 1988)
「疾患」:医療専門職が医学モデルに従って、病気を外側から再構成するもの
「病い」:患者や家族の当事者にとっての、内側から経験されたもの
☆「人間の病いは基本的に意味論的semanticな、意味を持つもの」
☆「人間は、意味論的semanticな、意味を持つもの」(interpretive)、解釈学的hermeneuticなものである」(Good and Good, 1981, p.175)
☆「聴き取ることのエチカethics」(Frank, 1995)「語りー聴き取る」という単純なやりとりのうちに、人間の社会を構成するエチカの原基を認めようとする

江口

「ナラティブ・ターン」というポストモダン

の考え方は、テキストへの注目ということから出てきたのですが、このことは同時に「社会構成主義」という新しい考え方と非常に連動しています。このナラティブの考え方の多くは「社会構成主義」を基盤に持っていると考えていいかと思います。ですので、「社会構成主義」についてここから簡単にご説明していきたいのですが、この源流は「現実の社会的構成」ということを定義したBergerの考え方が元になっているようです。「現実社会的に構成される」という考え方、それから、「現実、人々の言語的共同作業によって成り立つ」というような考え方があります。この基本的な考え方が、社会学、文学、歴史学、政治学、教育学、心理学、家族療法など様々な領域に派生し、影響を及ぼしてきました。

社会構成主義 social constructionism

・源流「現実の社会的構成」
(Berger, 1966)

「現実社会的に構成される」

「現実、人々の言語的共同作業によって成り立つ」

⇒社会学、文学、歴史学、政治学、教育学、心理学、家族療法



特に、それをナラティブというものと結びつけたのがGergenで、「社会構成主義」とナラティブを接続したという意味なのですが、「現実、人々の言語的共同作業によって構成されると同時に、ナラティブという形式によって影響される」ということを言っています。「社会構成主義」的な物の考え方、さきほどの「ナラティブ・ターン」のような物の考え方が、次第に一緒になって結びついてきているということです。

ナラティブ・アプローチと 社会構成主義の接続

・ケネス・ガーゲン
(Gergen, 1992,1994)

「現実、人々の言語的共同作業によって構成されると同時に、ナラティブという形式によって影響される」



「社会構成主義」そのものはどういうものか
というと、「現実(reality)、つまり現実の社会
現象や、社会に存在する事実や実態、意味とは、
社会的に構築されたものであり、全ての認識は、
社会的相互作用をもとにして構築され、維持さ
れるとする社会学の立場」ということができま
す。それから「社会的に構築された現実とは、絶
え間なく変化していく動的な過程として捉えら
れ、現実を人々が解釈、認識することにつれて、
現実そのものが再生産されると考える」、この
ような立場であり考え方です。グラウンデッド・
セオリーを勉強していると、その元になってい
るシンボリック相互作用論も非常に近い考え方
なので、1960年代のシカゴ学派あたりにナラティ
ヴ・ターンのルーツを見たりするのも頷けるの
ですが、「社会構成主義」という形でsocial
constructionismという形ではっきりと言われて
きた大元がGergenの言葉のようです。

社会構成主義 social constructionism

現実(reality)、つまり現実の社会現象や、社会に
存在する事実や実態、意味とは、社会的に構築さ
れたものであり、全ての認識は、社会的相互作用
をもとにして構築され、維持されるとする社会学の
立場。
社会的に構成された現実とは、絶え間なく変化して
いく動的な過程として捉えられ、現実を人々が解釈、
認識することにつれて、現実そのものが再生産さ
れると考える。

(Gergen, 1999)

ただし、ここで混乱してしまうかもしれない
ですが、「ナラティヴ・アプローチと理論的前提」
ということですが、もしナラティヴを使っ
て研究をする場合に、必ず「社会構成主義」に
基づかないといけないかということ、そうではな
いということになります。ナラティヴ、語りを
使って、それを方法として研究をするのだけ
けれど、それをどのような理論的前提と組み合わ
せるかというのは自由ですよ、というのがここに
書いてあることです。ナラティヴ・アプローチ
を行う際に、どのような理論的前提のもとに行
うかは、研究目的によるということで、例えば
本質主義との接続も可能で、「トラウマ」とい
うものを本質と考えると、「精神分析」の考
え方を本質と考えてナラティヴ・アプローチと

それをつなぎ合わせることも、研究目的にと
ってそれが必要であって妥当であればかまいま
せんよ、という話なのです。

ナラティヴ・アプローチと理論的前提

ただし、

- ・ ナラティヴ・アプローチを行う際に、どのような
理論的前提のもとに行うかは、研究目的によ
る。
ex.本質主義との接続も可能
「トラウマ」、「精神分析」

これまでナラティヴ・アプローチは研究にも
使えるし、実践にも使えるという話をしてきた
のですが、今度はナラティヴ・アプローチを実
践にどのように使うかを考えたいと思います。
「ナラティヴ・ターン」や「社会構成主義的」
な物の考え方が幅広く、とても多くの学問分野
に影響していて、その中の1つとして医療も影
響を受けてきたのですが、臨床では、どのよう
に「社会構成主義」が影響を及ぼしてきたかと
いうと、臨床で「社会構成主義」が展開された
動機は次の2つに表すことができます。1つは
病いをどう理解するかということと、もう1つ
は治療をどのように実践するかということ、こ
の2つの問いが「社会構成主義」が医療の中で
使われていく動機になります。それまでの「病
因論」と「治療論」という二分法の反省的な
捉え直しというのがこの中に含まれています。
「病いを理解する」とはどのようなことなのか？
と、「治療」とはいかなる行為を意味するの
か？というような2つの問いがこの中にあり
ます。

臨床における社会構成主義の展開

- ・ 臨床における社会構成主義展開の動機
 1. 病いをどう理解するか
 2. 治療をどのように実践するか
- ・ 「病因論」と「治療論」という二分法の反省的な
捉えなおし
 - ⇒「病いを理解する」とはどのようなことなのか？
 - ⇒「治療」とはいかなる行為を意味するのか？

これが主にどのように展開されたかというのと、これは野口先生のをそのまま受け売りのように書いているだけなのですが、1. 医療社会学における医療化論、2. 医療人類学における病いの意味と語り、3. 家族療法におけるナラティブ・セラピーというような3つの展開に野口先生が分けて説明されております。とても分かりやすいので、これに則っていきますけれど…。

臨床における社会構成主義の展開

1. 医療社会学における医療化論
2. 医療人類学における病いの意味と語り
3. 家族療法におけるナラティブ・セラピー

（野口、2005）

医療化論というのは、病いの社会的意味を扱うというものです。『隠喩としての病い』のなかで、Susan Sontagが言っているのですが、例えば、「中世におけるペストであるとか、近代における結核とか、現代における癌とか、病いの意味というのはそれぞれの時代によって社会の中で構成される」という考え方です。「ある現象が病気かどうかは社会的意味に依存している」として、病気が社会的に構成されることに着目する考え方です。「医療化」medicalizationとは、かつて病気とみなされていなかった現象が病気とみなされるようになり、医療の管轄下で統制されるようになる過程のことを言います。病気とは、「定義」をめぐる人々の共同作業によって構築される社会的構成物social constructsであるという考え方が基底にあります。

1. 医療化論

・ 病いの社会的意味を扱う

『隠喩としての病い』(Sontag, 1987)

カミングアウト←社会的意味の重大性

ある現象が病気かどうか←社会的意味に依存

* 病気か、道德的問題か、家族問題か

病気が社会的に構成されることに着目

「医療化」medicalization: かつて病気とみなされていなかった現象が病気とみなされるようになり、医療の管轄下で統制されるようになる過程

「逸脱の医療化」(Conrad & Schneider, 1980)

* 精神病、アルコール依存、アヘン中毒、多動症、児童虐待、同性愛、犯罪など。

病気: 「定義」をめぐる人々の共同作業によって構築されるsocial construct

次に「病いの意味と語り」ですが、マクロな観点から見るとどうなのかということ、ミクロな観点から見るとどうなのかということになります。まず、マクロな観点では「ある一般的な定義がどのように構成されるのか？」ということで、これは医療化論に相当します。それに対してミクロな観点というのは、「ある個人が、さまざまな定義とどのように出会って、どう取り入れ、どうまとめ上げていくのか？」ということで、これが病いの意味論を形成していきます。病気が個人の中でいかにして構成されていくのかという、個人的な意味づけに焦点をあてていくのがこの病いの意味論になっていきます。

2. 病いの意味と語り

1. マクロな観点

ある一般的な定義がどのように構成されるのか？⇒医療化論

2. ミクロな観点

ある個人が、さまざまな定義をどのように出会い、どう取り入れ、どうまとめ上げていくのか？⇒「病いの意味」論

* 病気が個人の中でいかにして構成されていくのか？

* 個人的な意味づけに焦点

病いの意味ですが、これを4つに分けて考えることができます。まず1つは症状自体の表面的な意味。これはKleinmanが考えていることですが、「お腹が痛い」と言ったら緊張しているとか、「食欲がない」と言ったら心配事があるとか、症状自体が表す表面的な意味。それから2番として、今言ったような文化的に際だった特徴を持つ意味ということで、例えば、中世の黒死病とか、かつてのハンセン病、結核、現代の癌、エイズなど、時代を特徴づける象徴的な意味が付与されるような病気といった具合に、病気の文化的な意味について考えるもの。それから3番として個人的経験に基づく意味について考えるもので、幼少期の体験などが、現在の病気や症状と結びつけられて形作られる意味というものがあります。それから4番目として病いを説明しようとして生じるような意味。「なぜ、ほかならぬこの私が？」ということでこれは「Why me question」と言うらしいのですが、なぜ、ほかならぬ私になるのか、というような

病いを説明しようとして生じるような意味というのがあります。病気に対する医学的定義というのは病いを説明しようとして生じる意味の中の1つとして捉えられます。人は、4つの意味を折り合わせながら、自分にとっての病いの意味を構成していく、というように考えます。

病いの意味 Kleinman, 1988

1. 症状自体の表面的な意味

「おなかが痛い」←緊張している
「食欲がない」←心配事がある

2. 文化的に際立った特徴を持つ意味

中世の黒死病、かつてのハンセン氏病、結核、現代のがん、エイズ←時代を特徴づける象徴的な意味が与えられる病気

3. 個人的経験に基づく意味

幼少期に体験などが、現在の病気や症状と結び付けられて、形作られる意味

4. 病いを説明しようとして生じる意味

「なぜ、ほかならぬ私が？」Why me question

* 医学的定義はこの一部

⇒ひとは、4つの意味を折り合わせながら、自分にとっての病いの意味を構成



病いの意味について、Kleinmanは、「患者は彼らの病いの経験を、つまり自分自身や重要他者にとってそれがもつ意味を、個人的なナラティブとして整理するのである。病いのナラティブは、その患者が語り、重要他者が語り直すストーリーであり、患うことに特徴的なできごとやその長期にわたる経過を首尾一貫したものにする。」という考え方を示しています。語ることによって、さまざまな出来事や経験や意味が整理され配列し直され、ひとつのまとまりとなる、ひとつの「物語」となることで、個々の経験に輪郭を与える枠組みができるということです。

病いの意味 Kleinman, 1988

「患者は彼らの病いの経験を、つまり自分自身や重要他者にとってそれがもつ意味を、個人的なナラティブとして整理するのである。病いのナラティブは、その患者が語り、重要他者が語り直すストーリーであり、患うことに特徴的なできごとやその長期にわたる経過を首尾一貫したものにする。」

⇒語ることによって、さまざまな出来事や経験や意味が整理され配列しなおされ、ひとつのまとまりとなる⇒ひとつの「物語」⇒個々の経験に輪郭を与える枠組み

病いのナラティブの話の続きですが、病いのナラティブにはタイプがあるとFrankは言っています。例えば、Frankは、「回復」、これを「再建」と訳している場合もありますが、「restitutionのナラティブ」というものと、「混

沌の語り」、「探求の語り」という3つに分けています。

病いのナラティブのタイプ

1. 回復(再建)の語り restitution narrative

2. 混沌の語り chaos narrative

3. 探求の語り quest narrative

Frank, 1995, 鈴木訳, 2002



回復というのは「restitution」ですね。「restitution」の語りというのは病いを健全な状態からの逸脱とみなし、健康な状態への復帰、回復を到達点として、物語を組織化していく語りです。これは病いになったときに、治って元の状態に戻っていくのだという考え方をベースにした語りということです。これは病いになったとしても、元に戻ると信じて、希望を持って語るという語りのことで、例えば、若返ろうと思って高いお化粧品を買ったりとか、エステに行ったりとか、整形とかしたりすると、それは元に戻れるというような、色々すれば全く元の若い自分に戻れるとかいうような、一種の「restitution」のナラティブの中に自分が生きているということなのですね。それで、私が教えている男子学生の人に「女の人だったらそういうことになるのだけれど、男の人だったらどういうことになるの？」と言ったら、「それは毛生え薬をつけるとかっていうことですか？」って答えてくれたので、「なるほどそういうことね」と話したのですが、これは自分が元に戻れるという、そのようなストーリーの中に筋立てて語られるということです。

回復(再建)の語り

- 病いを健全な状態から逸脱とみなし、健康な状態への復帰＝回復を到達点として、物語を組織化していく語り。



次が「混沌の語り」ですが、物語として一貫性・統一性を見出せぬまま、継続的な言葉の反復において生起する語りです。それは、筋立てによる統合を可能にする反省の作用を欠いた状態で、病いの現実が直接に露呈するような語りの形式です。

混沌の語り

- 物語として一貫性を統一性を見いだせぬまま、継続的な言葉の反復において生起する語り。

それは、筋立てによる統合を可能にする反省の作用を欠いた状態で、病いの現実が直接に露呈するよう語りの形式。



私は博士論文で4人の方にインタビューをして、それで3人の方まで個別に発表したのです。でも、まだ1人の方だけ発表してないので。で、それを後で思うと、3人の方は次の「探求の語り」なのです。回復の語りで元に戻れると思っているような語りじゃないのですけれど、最後にいう「探求の語り」なのです。ですが、一人発表できてない方は「混沌の語り」だったのだと、後でFrankを読んで私が思っていることなのですけど、解釈しきれなかったという思いがその方にだけあったのです。それで、その後も発表ができてないのですけど、でも「混沌の語り」だったのだと、今は思っています。それで、「混沌の語り」は「混沌の語り」として、どう解釈したらいいかなとか、考えていく余地があると思っているのですけれど…。しかし、余談なのですが、博士論文を書いた後に、後日談みたいなエピソードを書いているのですが、大体の人と今でも何らかのお付き合いをしているのです。年賀状を1年に1回とかそういうような人もいますけど、その「混沌の語り」の方も年に一度くらいはやり取りをしているのですが、その後、15年、18年経つうちに、その方が「混沌の語り」から脱して、後で言う「探求の語り」の方に移って来ているんだなということを、博士論文を書き終わってずっと後になって認識するということがあって、

それで逆にあの時は「混沌の語り」だったのだなと思うことがあります。それから、修士論文の時に、「長期入院中の精神分裂病患者（その時は分裂病患者と言っていました）の時間認知の分析」というテーマで研究をして、「結核患者との対比を通して」という副題が付いていたのですが、長期入院をしている統合失調症の患者さん30名と結核患者さん22名にインタビューをして比較分析するというのをしたんですね。余談のついでに言いますが、私、修士の時に、時間認知というテーマで研究をして、修士の学生でまだ研究の初心者だし、時間なんていう抽象的な概念を自分でも扱えるものかしらと思いましたし、いろいろな先生に相談にいても、「田中さんが時間認知？」みたいな、「それは無理なんじゃないの？」みたいな反応が返ってきて、被害的だったのかもしれませんが、自分でも無理なのかもしれないか思ったり…。それで南先生に個人面接でご相談した時に、南先生が「あなた、それをライフワークにする気があるの？」っておっしゃられたのです（とても優しい言い方でしたが）。先生は覚えていらっしゃるかどうか分かりませんが、私、それがとても印象に残っていて、よく考えて「ライフワークにします」と答えた記憶があります。そういうことが自分の中であって、ライフヒストリーの研究を博士論文でする時にも、修士で自分がした研究と、博士の研究の中に何らかの一貫性や繋がりを持ちたい、という思いがあって、修士の時は時間認知で、博士の時はライフヒストリーになったといういきさつがあります。

それで、これは修士論文の時の患者さんの語りなのですが、この時、別に「ナラティブ・アプローチ」というふうになにしていたわけではないのですが、後で見るとナラティブというか…。必ずしも「混沌の語り」と言えるかどうか疑問なところもあるのですが、でもたくさん聞いた結核の患者さんの中でもとても印象に残っている方で、多分実践的な側面で看護師として何かずっと心の中に残っている方の言葉なのですね。結核の患者さんの方の論文は発表してないのですが、このようにおっしゃっていらしているのです。

この方は再三咯血を繰り返していて、この時

とても重症で、個室に入っていて、看護者にほとんどすべてのケアを受けていた方で、離婚もされていたりして天涯孤独のような状況の方だったのですが、私が面接をお願いすると、この方は、

「こちらからお願いしたいくらいです。僕はもう、毎日毎日、この白い壁ばかりみて、気が狂いそうなんです。」

「やっぱり自分のやってきた行いというものがダメだったんですね。やっぱり私がやくざな生活をやってきたため、今こうやって、苦しんでいるんじゃないかと思います。過去に一緒にあった妻にも、もっと優しく誠意をもって接していれば、これがどんな状況になっても別れるようなことはなかったんでしょ。それだけのことをしていないから、…そういうふうと考えて、やっぱり私は愛を持って接していなかった。そういうふうに思っています。」

混沌の語り:ある結核患者の語り

「こちらからお願いしたいくらいです。僕はもう、毎日毎日、この白い壁ばかりみて、気が狂いそうなんです。」

「やっぱり自分のやってきた行いというものがダメだったんですね。やっぱり私がやくざな生活をやってきたため、今こうやって、苦しんでいるんじゃないかと思います。過去に一緒にあった妻にも、もっと優しく誠意をもって接していれば、これがどんな状況になっても別れるようなことはなかったんでしょ。それだけのことをしていないから、…そういうふうと考えて、やっぱり私は愛をもって、接していなかった。そういうふうに思っています。」

「そういう折りに、今度は、また昔から付き合っていた友人の具合が悪くなって、これなくなっちゃって…もう本当にやるせないですよ。そういうときにこの孤独になんか頼れるようなものはないか、毎日一生懸命、そればかり、念じているんですけれども、なかなか精神の平穏が保てないんで、苦しんでいるわけです。」

「そんなわけでもう一度最初から、聖書を勉強してみようかなという気持ちを持っているわけです。でも尊敬できるような牧師さんになかなか出会えないんですよ。」

「ところが、最近ここまで追いつめられると、はっきり言って誰でもいいやって思っちゃうんです。どんなことでもいいから、私と話をしてくださいっていうと救いになっちゃうんです。このままじゃ、神経症かなにか、精神病になっちゃって、精神病院に送られてしまうんじゃないかと思うくらい、ここのところ悩んでいます。」

「そういう折に、今度は、また昔から付き合っていた友人が具合が悪くなって、これなくなっちゃって…もう本当にやるせないですよ。そういうときにこの孤独になんか頼れるようなものはないか、毎日一生懸命、そればかり、念じているんですけれども、なかなか精神の平穏が保てないんで、苦しんでいるわけです。」

「そんなわけでもう一度最初から、聖書を勉強してみようかなという気持ちを持っているわけです。でも尊敬できる牧師さんになかなか出会えないんですよ。」

「ところが、最近ここまで追いつめられると、はっきり言って誰でもいいやって思っちゃうんです。どんなことでもいいから、私と話をしてくださいっていうと救いになっちゃうんです。このままじゃ、神経症かなにか、精神病になっちゃって、精神病院に送られてしまうんじゃないかと思うくらい、ここのところ悩んでいます。」

「それなのにね、私はなぜ、キリストに取り組めないのか、そこがね、私の駄目なところでね。はっきり言ってキリストがね、なぜ神なのかがわかんないんですよ。」

「病院にいてもですよ、誤解されると困るんですけど、大きな心で受け止めてくれて、ああ俺のことみてくれるなって安心感があれば…。ところがね、みんな忙しすぎるんですよ。」

「この先どうなるのかなあ、このままこれで、俺の人生は終わるのかなあ、また爆発(略血)するのかなあ。爆発しても死なないで済むのかなあ。どんくらい待つのかなあと、いろんなこと考えちゃって。」

「それなのにね、私はなぜ、キリストに取り組めないのか、そこがね、私の駄目なところでね。はっきり言って。キリストがね、なぜ神なのかがわかんないんですよ。」

「病院にいてもですよ。誤解されると困るんですけど、大きな心で受け止めてくれて、ああ俺のことみてくれるなって、安心感があれば…。ところがね、みんな忙しすぎるんですよ。」

「この先どうなるのかなあ、このままこれで、俺の人生は終わるのかなあ、また爆発(略血)することかなあ。爆発しても死なないで済むのかなあ。どんくらい待つのかなあと、いろんなこと考えちゃって。」

田中美恵子、1988

と語られた方がいて、結核の患者さんでお話聞かせていただいた中でも、後々まで忘れないで残っている語りというのがあるのですが、これはその中の1つです。自分で今までのことを色々振り返られたりしているから完全に「混沌の語り」とは言えないかもしれないのですが、ある種の「混沌の語り」のような気がしています。この時は、

「ここまで追いつめられるとどんな人でも聞いてくればそれだけで救いになっちゃうんです」

とおっしゃっているように、調査者としては耳を傾けるということではできたとはいえるかもしれないのですが、自分の中で今でも残っている語りですね。例えばもっと後になってだったら、すぐにリエゾンナースに繋いでとか、もっとぱっぱと動けたかもしれませんが、当時そんなふうに自分も動けなかったというのがあったせいかもしれません。

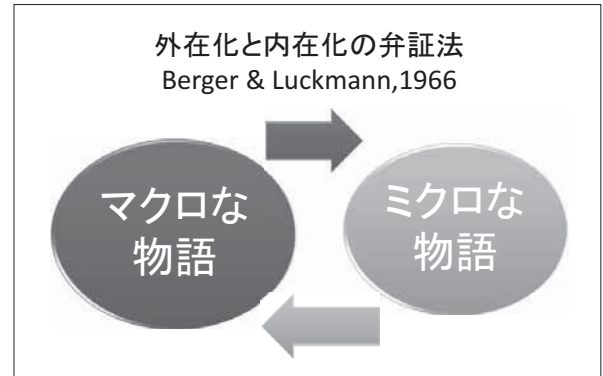
それから3つ目のタイプとして「探求の語り」なのですが、「病いの苦しみを受け入れ、身体の偶発性に翻弄される生の在り方に、新たな意味の探求の機会を見出すような語り。この語りにおいて、病者は初めて病いの経験を自己物語へと変換し、これを自分自身の声で語ることができるようになる」。私が博士論文でお話をまとめた4人の方の内3人が、この「探求の語り」だったような気がします。

探求の語り

- 病いの苦しみを受け入れ、身体の偶発性に翻弄される生のあり方に、新たな意味の探求の機会を見出すような語り。
- この語りにおいて、病者は初めて病いの経験を自己物語へと変換し、これを自分自身の声で語ることができるようになる。

この図は、マクロな（大きな）物語と、小さな物語が行ったり来たり影響し合いながらセルフヘルプグループとかもそうだと思うのです

けれどー、新しい物語を生成していくという、そのような考え方を示しています。



臨床における社会構成主義の展開として、医療人類学における病いの意味と語りや、ナラティブのタイプなど様々なお話をしてきたのですが、最後に、3つ目としてはナラティブ・セラピーという形で発展しています。ナラティブ・セラピーとは治療にまつわる事柄をナラティブ・アプローチによって解析することで、家族療法の1つの学派が提唱する新しい種類の治療的介入で、1980年代から始まっています。「社会構成主義」を理論的基盤としていて、「セラピストとクライアントが共同で物語としての自己を構成していく実践」です。さっき色々説明した「社会構成主義」の考え方が影響しています。

3. ナラティブ・セラピー

ー実践としてナラティブ・アプローチー

ナラティブ・セラピー

①治療にまつわる事柄をナラティブ・アプローチによって解析すること

②家族療法の1つの学派が提唱する新しい種類の治療的介入 1990年代～

・**社会構成主義** (Macnamee & Gargen, 1992) を理論的基盤

「セラピストとクライアントが共同で物語としての自己を構成していく実践」

これは、①現実社会的に構成される、②現実と言語によって構成される、③言語は物語によって組織化されるという考え方に基づいています。物語は、語られる度に、その都度変化する可能性を持っている。今まで色々な方向からお話をしてきたのですが、基本的にいつも考え方のベースは同じなのですね。「物語」の変化

が「語り」の変化を呼び起こし、それがまた「物語」を変化させるってような循環構造を持っている。「物語」と「語り」の相互的で連続的な変化があるという考え方が前提になっています。

ナラティブ・セラピーの前提

- ①現実社会的に構成される
- ②現実言語によって構成される
- ③言語は物語によって組織化される

* 物語は、語られるたびにその都度、変化する可能性をもっている
「物語」の変化⇒「語り」の変化⇒「物語」の変化
「物語」と「語り」の相互的で連続的な変化

ナラティブ・セラピーの潮流は大きくは3つあって、物語の書き換えということを使ったWhite & Epstonですが、この人たちの場合は「ドミナント・ストーリー」から「オルタナティブ・ストーリー」への書き換えを目指すということで、これはMichel Foucaultの考え方に影響されています。

ナラティブ・セラピーの潮流

1. 「物語の書き換え」(White & Epston, 1990)

ドミナント・ストーリー
⇒**オルタナティブ・ストーリー**

Foucault, 1980「抑圧された知」「正常化(規範化)する知」権力をもつ者の知が、真実を覆い尽くし支配するという認識⇒それからの脱出



物語の書き換えや語り直しですが、「自分のストーリーを語ることは、体験を語り直すことであり、現在という紙の上に歴史を書き上げることである。クライアントには何か話すべき事があり、そして、この何かは物語としての整合性を持ち、語られるストーリーの文脈のなかでそれ自身の真実を主張している」という考え方があります。それで、物語の書き換え、語り直しということで、語ることが自分のアイデンティティを形成していくという考え方があります。

物語の書き換え・語り直し

- ・自分のストーリーを語ることは、体験を語り直すことであり、現在という紙のうえに、歴史を書きあげることである。
- ・クライアントには何か話すべきことがあり、そして、この何かは物語としての整合性を持ち、語られるストーリーの文脈のなかでそれ自身の真実を主張しているということである。

Anderson & Goolishian, 1992. 野口訳, 1997

それから2つ目の潮流が「無知のアプローチ」というもので、専門的知識によって評価するのではなく、クライアントの物語について、自分は何も知らないという立場から耳を傾ける、そういう態度のことを言います。そのことから「いまだ語られることの無かった物語」から「新しい物語としての自己」が生まれていくという考え方が出てきます。

ナラティブ・セラピーの潮流

2. 「無知のアプローチ」(Anderson & Goolishian, 1992)

専門的知識によって診断評価するのではなく、クライアントの物語について、自分は何も知らないという立場から耳を傾ける

⇒「いまだ語られることのなかった物語」⇒新しい「物語としての自己」

ナラティブ・アプローチを使って研究するときも、基本的な姿勢は、この無知のアプローチではないかと私は思っています。「無知であるためには、セラピーにおける理解、説明、解釈が、過去の経験や理論的に導かれた真理や知識に制約されてはならない」ということが重要で、このことには「解釈学」、「社会構成主義」からの影響があります。なので、ここでちょっと解釈学的立場について簡単に書いたのですが、それは、「理解とは常に解釈である」という考え方、「理解の中に特権的な視点はない」という考え方。それから「言語と歴史は、常に理解を方向付けると同時に制約もする」。私たちが何かを理解する時には、自分たちが使っている日本語や、今まで自分が背負ってきた日本の歴史とか個人史とかによって、ある一定の方向づけがされているし、かつ、制約もされているので

すね。「意味と理解は、会話によって言葉を交わす人々の間で構成されていく」。これは今まで話してきた考え方とオーバーラップしているのですが。それから、「人々の行為は、人々の構成作業と対話によって想像された＜現実＞の中でのなされる」。何を現実とするか、認識するか、解釈するかによって、何の行為、どういう行為をするかってことが決まってくるということで、理解と行為との関係について言っています。それから「他者とともに作り上げた物語的な＜現実＞が、個人の経験に意味とまとまりを与える」という考え方がベースになって、これが無知のアプローチにも影響を与えています。ですので、「解釈学」と、「社会構成主義」は繋がっているところがあると思います。

無知のアプローチ

- ・ 無知であるためには、セラピーにおける理解、説明、解釈が、過去の経験や理論的に導かれた真理や知識に制約されてはならない。

←解釈学、社会構成主義からの影響

解釈学的立場

- ・ 「理解とは常に解釈であって、理解のための特権的な視点というものはない」
- ・ 「言語と歴史は、常に理解を方向づけると同時に制約もする」
- ・ 「意味と理解は、会話によって言葉を交わす人々の間で構成されていく」
- ・ 「人々の行為は、人々の構成作業と対話によって創造された＜現実＞のなかでなされる」
- ・ 「他者とともに作り上げた物語的な＜現実＞が、個人の経験に意味とまとまりを与える。」

Anderson & Goolishian, 1992, 野口訳, 1997

それからナラティブ・セラピーの3つ目ですが、これは「リフレクティング・チーム」というもので、セラピストたちのコミュニケーションを、クライアントや家族に観察してもらい、意見を述べてもらう、観察する立場とされる立場が逆転するというようなものがあります。でも、これはナラティブ・アプローチが実践では家族療法の分野で盛んになって確立されたのですよということで、家族療法の中では物語の書き換えとか、無知のアプローチとか、リフレクティング・チームというのが代表的です。

ナラティブ・セラピーの潮流

3. 「リフレクティング・チーム」(Anderson, 1992)

セラピストたちのコミュニケーションを、クライアントや家族に観察してもらい、意見を述べてもらう。

* 観察する立場とされる立場の逆転

1. 2. 3. とも対等性・平等性を重視

それから今度はナラティブで研究するとき、分析をどうするかということですが、野口先生はナラティブ分析というのを大きく、「構造分析」と「機能分析」との2つにわけています。「構造分析」というのはナラティブの内部構造を分析することで、一番有名なのがラボフ・ワレツキー・モデルというものです。それと、スタンザ分析というのも有名な例です。「機能分析」というのはナラティブを手がかりにした何らかの現象の分析、「ナラティブが何らかの現象に対して、どのような機能を果たしているか？」という問いで分析していくことです。

ナラティブ分析 ー構造分析と機能分析ー

構造分析: ナラティブの内部構造を分析
(ラボフ・ワレツキー・モデル) (スタンザ分析)

機能分析: ナラティブを手がかりにした何らかの現象の分析、ナラティブが何らかの現象に対して、どのような機能を果たしているか？という問い

(野口, 2009)

Reissmanは、「ストーリー形式をもつテキストの解釈のための一群の方法」というようにナラティブ分析を簡単に定義しています。

ナラティブ分析とは？

- ・ ストーリー形式をもつテキストの解釈のための一群の方法 (Reissman, 2008)



そしてReissmanの本の中では、ナラティブ分析をこのような4つにわけています。実はこの本がとても良い本だと思ったので、私の所の博士の学生さんと約1年をかけて読んだのですが、でもまだ最後まで行っていなくて。「視覚分析」のところまでしか行っていなくて、なかなか難しいので十分に理解もできていないのですが、とりあえず読んだことから説明すると「テーマ分析」、「構造分析」、「対話/表現分析」、「視覚分析」の

4つの種類に分けてあります。

ナラティブ分析の種類

- テーマ分析 Thematic Analysis
- 構造分析 Structural Analysis
- 対話／表現分析 Dialogic/Performance Analysis
- 視覚分析 Visual Analysis

Reissman, C. K., 2008

「テーマ分析」とは、「何が？」ということです。特に内容に焦点をあてる、もっとも一般的なナラティブ分析の方法です。私が博士論文の時に精神障害の当事者の方たちの物語やライフヒストリーを聞いて、そこにどのような意味があるかということを探求したというのはこの「テーマ分析」に入ります。確かにここに書いてあるように解釈的現象学や解釈学の影響を受けた多くの看護・医療研究で、病いの意味の探求に応用されています。それで、グラウンデッドセオリー・アプローチとどう違うかというのはその下に書いてあるので、また読んでいただければと思います。

テーマ分析(何が?)

- 特に内容(語られたこと、書かれたこと、視覚的に示されたもの)に焦点
 - * もっとも一般的なナラティブ分析の方法
 - * 解釈的現象学や解釈学の影響を受けた多くの看護・医療研究で、病いの意味の探求に応用
 - * グラウンデッドセオリー・アプローチと混同されるが、その違いは、諸ケース全体を貫く構成要素となる諸テーマによって理論化するのではなく、あるケースそのものから、理論化することで、ストーリーを無傷のままでおくこと。

次は「構造分析」ですが、これは「どのように語られたか」ということを言っています。この場合、語られたこと「told」ではなく、語ること「telling」に焦点があたります。語り手の経験から、ナラティブそれ自体を焦点とすることにシフトする、語り手にとってどういう意味があるかということではなくて、どういう語り方をしているかということ自体を分析対象と

します。ナラティブの形式・構造への注目となります。例えば学校や、病院、法廷などでの語りの形式には一定の決まりというか形があるので一特権を付与するような語りの形式があるというか、語りの形式とか構造をみていく。それからこの本の中で例として出ていたのが黒人の少年たちによる暴力がよく起こっているような町の調査で、たくさんの男の子たちにインタビューをして、暴力が起こったときの話を聞く例では、「トラウマティックな経験を語るときのラップのリズム」とかというように、語り方がラップのリズムになっているのだという分析をしたりしています。

構造分析(どのように?)

- 語られたことtoldではなく、語ることtellingに焦点
- 語り手の経験から、ナラティブそれ自体を焦点とすることにシフト
- ナラティブの形式・構造への着目
 - ex. 学校や病院、法廷などでの語りの形式⇒特権を付与
 - ex. トラウマティックな経験を語る際のラップのリズム

それで、私がこれを読んで、修士課程の時の患者さんのデータを思い出して、もしかしてこれとちょっと関係あるかなと思ったのですが、これは統合失調症の患者さんで、幻聴とか妄想とかを持ってらっしゃるんですけど、でも日常生活は自立していて、外勤作業に週に2日くらい出っていて、お蕎麦屋さんに行っていた患者さんなんですね。この患者さんに私が、この時は時間認知についてお話をお聞きしたので、ライフヒストリーではないのですが、日常的にどのように過ごされているかなど、様々なことをお聞きしたのですけれど、そうしたらこのように語ったのですね。

「別にいつ死んでもいいと思っている。だけど、実際に現場に当たって、こういうふうに車を運転するとなると、無我夢中なんですよ。おっとろしくなってね。眼が回るほど、忙しい。実際にこういうふうに車に乗ってね、やっていると眼が回るほど忙しい。」

こんな風にすごく早口でおっしゃんたんですよ。

「車の運転毎日やってないから、車乗るとおっかないんですよ。死んでも良いとは思っていますけどね。だけでも実際慌ただしいんですよ。おっとりしいんですよ」

って、ものすごく早くおっしゃんたんですよ。

「仕込みだってそうですよ。だってあれだって、お蕎麦屋さんのお湯とか、沸騰しているでしょ。あの中にボチャンと手を突っ込んでじゃうとかね。水で皿洗うっていうか、今湯沸かし器がありますからね。お湯がある程度やれるんですけど、それで洗うのにね、お皿洗って、またその調子で、釜の中に手を突っ込んでじゃったら大やけどでしょ。あの、グラグラ沸騰して…」

「別にいつ死んでもいいと思っている。だけど、実際に現場に当たって、こういうふうに車を運転するとなると、無我夢中なんですよ。おっとりしくなってね。眼が回るほど、忙しい。実際にこういうふうに車に乗ってね、やっているとなんか眼が回るほど忙しい。車の運転毎日やってないから、車乗るとおっかないんですよ。死んでもいいとは思っていますけどね。だけでも実際、慌ただしいんですよ。おっとりしいんですよ。」

「仕込んでそうですよ。だってあれだって、お蕎麦屋さんのお湯とか、沸騰していでしょ。あの中にボチャンと手を突っ込んでじゃうとかね。水で皿洗うっていうか、今湯沸かし器がありますからね。お湯がある程度やれるんですけど、それで洗うのにね、お皿洗って、またその調子で、釜の中に手を突っ込んでじゃったら、大やけどでしょ。あの、グラグラ沸騰して……」

田中美恵子、1988

というように、実際にはもっと早く喋られたんです。テープ起こしをするのも大変だったのですが、何回も何回も当時のアナログテープで行ったり来たり。けれど、分析をする時にこの方がとても早く話をしたということが、あるときヒントになったのですね。というのは、この方は他にもこういうことも言っていたんですよ。

「夕日を見るとすごく泣けてきますね。」

この時はゆっくりした話し方だったのですよ。

「僕を泣かせる女の子がいるんですよ。幻聴であるんですよ。」

それから私がインタビューの中で、時間の感じ

方を聞くために、「退屈ですか？」と聞いたら、

「退屈はしてられないんですよ。」

とおっしゃんたんですね。

「退屈という屈という字には出るっていう漢字が入ってるけど、自分は出られないんだから、旗本退屈男にはなってもらえないんですよ。」

というようなことを最後に私に話をさせて、その後、言われたのが、「退屈」じゃなくて、

「困っているっていう字あるでしょ？箱に囲まれて木って書いて。困っているって言葉にしているんですけど、自分は。出られないんですよ。現実に」

というようにおっしゃった。

「夕陽をみるとすごく泣けてきますね。僕を泣かせる女の子がいるんですよ。幻聴であるんですよ。」

「困っているっていう字あるでしょ？箱に囲まれて木って書いて。困っているって言葉にしているんですけど、自分は。出られないんですよ。現実に。」



修士論文のときに、統合失調症の方や結核の方をグループ分けにしてパターン化したのですが、この方だけがどのパターンにも入らなくて困っていたのですね。けれども、後で私は、さきほど私が声に出して読んだように、語り方のスピードが「本当に目眩がするようだな」と思って、ちょうど「ジェットコースターに乗っているみたいだな」とあるとき思ったのですね。それで、この人だけ、一例だけ別にして、「ジェットコースターの時間のずれ感覚」というケースとしてまとめました。

多分、この人は相当自立度が高く外に行ってお蕎麦屋さんとかでも働くことができるのだけれど、でも心の中ではまだ幻聴の世界で生き

ている部分があるのですよね。相当、現実見当識が高いのだけれど、心の中ではまだ現実的ではなくて、妄想の中に生きているところがあって、そのような方たちが実際に「生身」で現実に出た時に、自分の中の時間の流れの速さと、現実の時間の流れの速さとの間にずれがあって、何の覆いもなく早い乗り物に乗っているような、ジェットコースターに乗っているときのような「時間のずれ感覚」を体験しているのではないかと思って。それで、この方はどのタイプにも入らなかったのですが、逆に「時間のずれ感覚」という例として書きました。それが、さきほど言ったReissmanの本の中の、語り方の分析の一例と共通しているのではないかと思って、自分の体験から引用させていただきました。

それで分析の3つ目です。これは「対話/表現分析」で、この場合は主に口語の会話のやり取りの分析をします。インタビューなど、2人以上のやり取りを分析します。今までの「テーマ分析」や「構造分析」の方法を使いながら、更に新しい次元を追加していくもので、この場合、文脈を読むことが要請されてきます。「誰に」「いつ」「なぜ」というのが探求されますけれど、複数の人たちが、一対一でもダイアログでもいいのですが、どのように社会的現実を相互作用を通して構築しているのかというのを見ていきます。例えば、有名なものにアイデンティティのパフォーマンス研究というものがあります。「対話／表現分析」と訳したのですが、表現というところはパフォーマンスなんです。「Dialogic/Performance分析」なのですが、アイデンティティというのは聴衆に対してパフォーマンス（表現）していくことで形成されていくということに関する研究がアイデンティティのパフォーマンス研究で、ある一定の聴衆を考慮して自分を表現して、その聴衆から受け取られることによって、アイデンティティが作られていくというようなものの考え方です。それからこの対話/表現分析というものに、ベースとして影響を与えたのが、Bakhtinの文学研究でこれは難しくてよくわからないんですけど、Bakhtinという方がいろんな文学テキストを研究して、ある一人の著者が書いている文学作品

の中には、著者の声を越えた以上の声が含まれているということを明らかにして、人が何か物を語るといことの中には、多くの人の声が混ざっているというような考え方を生み出しました。これを多声的、多重音声的というふうに言います。

対話／表現分析 (誰に？いつ？なぜ？)

- 口述のナラティブへの幅広く多様な解釈的アプローチ
* 他の2つの方法を用い、さらに新しい次元を追加
- 文脈(調査者、場面、社会環境の影響)を読むことを要請
- 誰に？いつ？なぜ？を探究
- どのように社会的現実が相互作用を通して構築されるのか？
ex. アイデンティティのパフォーマンス研究(アイデンティティはどう表現されるのか？聴衆への考慮)
- Bakhtinの文学研究: 筆者の声を越えたテキスト、多声的 polyphonic、多重音声的 multi-voiced

最後は「視覚分析」ですが、言葉はコミュニケーションの一つの形式にすぎないということで、この場合は写真、芸術作品、ビデオなどをデータ源としてナラティブ分析をしていきます。写真とともに物語が展開する場合もありますし、写真など様々なものを見て、研究者がストーリー化をして、それを分析するという場合もあります。しかし、私たちのコミュニケーションというのはジェスチャー(身体動作)や音などのような物も全部入るので、それらもデータ源として、一見言葉とは無縁の物を用いて、ナラティブ分析をしていくというのが「視覚分析」です。

視覚分析

- 言葉はコミュニケーションの1つの形式にすぎない
ジェスチャー、身体動作、音、イメージも意味を伝える。
芸術作品、写真、絵、コラージュ、ビデオ日記
言葉とイメージの統合
⇒そこからストーリーを作る。



古めかしい写真がこれしかなかったのが、弘前に行った時に「太宰治 学びの家」という場所で撮った写真を使ったのですが、古い写真など、例えば、移民の人たちの家族の歴史をずっ

と写真に綴ったりして、そこから研究をしていくような例や、それからちょっとショッキングな例が出ていますが、乳癌になった方が自分の病気の症状をずっと写真に撮っていて、それをまた研究者が研究していくというような例が載っています。つまり、古い写真などを使ってやっていきます。



ナラティブの話というのはここで終わりです。それで、私はライフヒストリー研究を博士でしたというお話は何回もしたのですが、その時に1つは臨床で患者さんの人生に触れるような、必ずしも語りというわけではなかったのですが、人生について、1コマですけれど考えさせられるようなことがあったりということが、博士論文のきっかけになっています。1993年に博士課程に入学したのですが、その時はちょうど精神保健法の見直しの年でした。1987年の精神保健法改正に続いて、1993年がその見直しの年だったのですが、その時、世界精神保健連盟WFMHの世界大会が幕張で行われました。私は博士の学生でちょうど博士論文のテーマを考えている時でしたので参加しました。専門家の会議もさることながら、当事者の方たちの会議が、おおそ1000人くらい集まっていたのではないかと思います。ものすごい熱気で、身体障害の方など、精神障害の方以外にもたくさん集まっていって、車椅子などで応援にいらして、ホールの外廊下にもたくさんの障害者の方がいらしていました。そこは、専門家会議のとはまた全然違うすごい熱気で、次から次へと、世界中の精神障害の当事者、ユーザーの方が壇上に登って御自分の体験を堂々と話されるのを聞いて、日本の方も堂々と話されるの

を聞いて、非常に感動したのです。なので、博士論文の時に精神障害者の方に詳しい人生史を聞くと言うことは、それこそ、「話してくれる人がいるのだろうか」とか、「そんなことしていいのだろうか」等の様々な危惧が私や周囲の人々にあったのですが、幕張のユーザー会議に出たことによって、私の中では日本の中には自分の人生史を積極的に語りたいという人は必ずいるはずだという強い確信が生まれたんですね。それで、そのところは揺らがなかったんですね。

◆私がライフヒストリーに関心を持つようになった経緯◆

臨床での経験

1993年：博士課程入学

精神保健法の見直しの年

WFMH in 幕張での ユーザー会議

最後に、教育におけるナラティブ・アプローチの活用についてですが、ナラティブというのは結局実践でも使えますし、研究ではもちろんのこと、教育でも使えます。

ナラティブ・アプローチの可能性

実践で
研究で
教育で



私は女子医大に勤めて16年になるのですが、勤めた最初ぐらからずっと精神看護の授業の一番最後に当事者の方3名に来ていただいております。普段はざわざわしている学生も、その時だけは「シーン」として耳を傾けて聞いています。いつも感想を書いてもらうんですけど、私たちの授業より最初から最後まで当事者の方に話してもらった方がよ

かったのではないかと思うくらい、学生はいつも多くを学んでいるようです。

でも、当事者の方たちも学生にも直接おっしゃっていたのですが、「ここに来て話をすることで、いつも学生さんたちの感想を読むことが楽しみなんですよ」って、いつも全部の学生の感想文に丁寧に眼を通してくださって、そして「それが自分をさらに強くする」っておっしゃっているのです。私も十年以上お話を聞いているのですが、基本のお話はほとんど同じようであっても、その時その時によってその方の解釈の違いや、小さな変化があって1回ごとに違うのです。自分たちも、そのように1回ごとに違うっておっしゃっていて、一緒に3人で話していても他の人のも違う、聞くのが楽しいって言っています。でも例えば、この前は若いとき妄想とか幻聴とかものすごく強かった患者さんが、「ああ、俺また同じ事話しているよー」と自分で話ながら思っていて、「飽きちゃいましたよ、来年からはもういいですよー」とおっしゃったりして、リカバリーというのはここまで来るのだなと思ったりしていました。

そのような当事者の語りや、新人ナースの語りというものもあるのですが、病院の中で、臨床のナース、師長、主任など、先輩クラスの方にも初めて臨床に来たときのことを語っていただいたり、師長さん同士で語ったりなど、そのようなこともやっています。

教育におけるナラティブ・アプローチの活用

- 当事者の語り
- 新人ナースの語り



それで、学生の感想を最後にして終わりたいと思うのですが、例えば、これは、今年に行ったのですが、「当事者の方のお話を聞けてとても自分のためになりました。皆さん苦しい中でもどうにか前向きにという心や、まさに誠実、

実直に様々なことをやってきたという姿が、こんなただの学生にもしっかり向き合ってお話をしてくださることは嬉しく、そして自分自身の心や姿を改めようという気持ちや元気をいただきました。3人の方のお話を聞いて、素直に感じたのは精神疾患があって、たくさんつらい経験をしたのに、その時も今も色んなことに取り組み頑張っているんだと思った。」

「どんな病気になったとしても、支えがあれば人は救われるし、それがまた別の人を救うことができるんだと感じた。」や、

学生の感想: 当事者の語りを聞いて

- 当事者の方の貴重なお話を聞いて、とても**自分のためになりました**。皆さん、苦しい中でもどうにか**前向きに**という心や、まさに**誠実、実直に様々なことをやってきたという姿**、こんなただの学生にもしっかり向き合ってお話をしてくださることはうれしく、そして**自分自身の心や姿を改めようという気持ちや元気を**いただきました。
- 3人の方のお話を聞いてみて、素直に感じたのは、精神疾患があってたくさんつらい経験をしたのに、その時も今もすごくいろいろなことに取り組み、がんばっているんだと思った。どんな**病気になったとしても、支えがあれば人は救われるし、それがまた別の人を救うこともできるんだ**と感じた。



「お話を聞いて誰にでも起こり得ることなんだということを学んだ。」ということもあります。

2番目のところを読むと、「病気の当事者ということでしたが、お三方とも生き生きとしておられて、笑顔もとても素敵で勇気づけられました。」や、「患者さんの病気をみるだけじゃなくてそこにいる人として患者さんをみなければいけないと思いました。」

それから下の方で、「病気と闘っている中でも前を向いて生きようとしてる姿にとっても勇気をもらいました。」

学生の感想 当事者の語りを聞いて

- お話を聞いて印象的だったのは、やはり**誰でも起こり得るものなんだ**ということです。自分の要る環境や睡眠状態などによって病気の原因となってしまうということもあり、日常で防げる反面、起こりやすいものだわかりました。
- 病気の当事者ということでしたが、お三方とも生き生きとしておられ、また笑顔がとても素敵で**元気づけられました**。
- 患者さんの病気をみるだけではなく、**そこにいる人として患者さんのことを見なければいけない**なあと感じました。
- 体験談をお話ししてくださるということで、精神疾患を治療し、完全に治った方が来てくださると思っていたのですが、ずっと病気と闘っている方々で驚きました。そして、**精神疾患は身体の病気とは違って、ずっと付き合っていかなければならない病気である**と思いました。
- また、**病気と闘っている中でも前を向いて、生きようとしている姿に、とても勇気をもらいました**。



この勇気という言葉がすごく多かったです。次も、「勇気のいることだと思った」や、「自分も勇気をももらった」や、「看護師として頑張ろうと思った」とか書いているのです。

また、「病気を持っている患者さんとして接するのではなく自分と同じように生きている人として接する」や、「患者さん方も多くのことを人に伝えて社会に役立とうとしてることを感じました」ということを書いていました。

学生の感想 当事者の語りを聞いて



- 自分のつらかった時の体験を話すのは、すごくエネルギーを要する。勇気のいることだと思えます。それでも私たちに話してくれたことは、学んでほしい、知ってほしいという気持ちがあったからだと思います。
- とても温かく学生の質問に答えてくださっている姿をみて、精神障害に対するイメージもプラスに変わることができました。
- すてきなアドバイスもいただき、私も看護師目指して頑張ろうと思いました。
- 最後に言っていたように、自分も病気を持っている患者さんとして接するのではなく、「自分と同じように生きている人」と接することができるようにしたいと思った。
- 今回の話を聞いて、私は精神障害を持った人でも家族の支えやまた地域、病院の協力によって、自分の症状を理解し、それを多くの人に伝え、社会に役立つことをしていることを感じました。
- もっと、心をも看護しているよう努力していきたいです。

様々な観点から学んだと思うのですが、勇気をももらったということがすごく言われていて、そうだなあととても思いました。いつも話に来てくださる3人の方たちは本当にすごく勇気があるんですね。ものすごい勇気を持って、リカバリーされてきたので、その勇気が学生たちに伝わって、その勇気を学生たちが受け取ったというのは「なるほど、そうだな」と感じました。

私としては機会をいただいてナラティブのお話ができただけで、自分の勉強になって、貴重な機会をいただいたと思っています。午後もおそらく様々なナラティブがなされると思いますので、そちらがちょっと楽しみだなと思っています。

ます。私もどこかに参加させていただきたいと思っています。どうも長時間、ご静聴ありがとうございました。



ご静聴ありがとうございました。

文献

- 野口裕二：ナラティブアプローチ、2009。
- 野口裕二：ナラティブの臨床社会学、2005。
- 野口裕二：物語としてのケア・ナラティブ・アプローチの世界へ、医学書院、2002。
- 小森康永、野口裕二、野村直樹編著：ナラティブ・セラピーの世界、日本評論社、1999。
- シーラ・マクナミー、ケネス・J・ガーゲン編、野口裕二、野村直樹訳：ナラティブ・セラピー社会構造主義の実践、金剛出版、1997。
- 小森康永：ナラティブ・セラピーを読む、ヘルスワーク協会、1999。
- 江口重幸：病いの経験を聴く－医療人類学の系譜とナラティブ・アプローチ、精神医学研究事業編集。
- Reissman, C. K.: Narrative Methods for the Human Sciences, Sage, 2008。
- Bruner, J. (1990): Acts of Meaning, Harvard University Press, Cambridge。
- Bruner, J. (1986): Actual Mind, Possible Worlds, Harvard University Press, Cambridge。田中一彦訳：可能世界の心理、みすず書房、1998。
- Ricoeur, P. (1990): Soi-meme comme un autre, Seuil, Paris。久米博訳：他者のような自己自身、法政大学出版局、1996。
- Kleinman, A. (1988): アーサー・クラインマン、江口重幸、五木田紳、上野豪志訳：病いの語り－慢性の病いをめぐる臨床人類学、誠信書房、1996。
- Good, B. and Good, M. D. (1981): The Meaning of Symptoms, In Eisenberg and Kleinman, eds. The Relevance of Social Sciences for Medicine, Reidel, Dordrecht, pp.165-196。
- Good, B. (1994): Medicine, Rationality, and Experience: An Anthropological Perspective, Cambridge University Press, Cambridge。
- Frank, A. W. (1995): アーサー・W・フランク、鈴木智之訳：傷ついた物語の語り手－身体・病いの倫理、ゆみる出版、2002。

- 田中美恵子：長期入院中の精神分裂病患者の日常活動との関わりからみた時間認知の分析－結核患者との対比を通して、聖路加看護大学大学院看護学研究科修士論文、1989。
- 田中美恵子：長期入院中の精神分裂病患者の時間の流れの速さに関する感覚の分析－結核患者との対比を通して、看護研究、23(3):42-56, 1990。
- 田中美恵子：精神障害・当事者としての病いの意味－地域で生活する4人のライフストーリーから－、聖路加看護大学大学院看護学研究科博士後期課程学位論文、1997。
- 田中美恵子：ある精神障害・当事者としての病いの意味－地域生活を送るNさんのライフストーリーとその解釈、看護研究、33(1):37-59, 2000。
- 田中美恵子：ある精神障害・当事者としての病いの意味－Sさんのライフストーリーとその解釈：ステイタマからの自己尊重と語り、聖路加看護学会誌、4(1):1-20, 2000。
- 田中美恵子：ある精神障害・当事者のライフストーリーとその解釈(第1部)－地域生活を可能とした要因および個人における歴史と病いの関係、東京女子医科大学看護学部紀要、5:1-15, 2003。
- 田中美恵子：ある精神障害・当事者のライフストーリーとその解釈(第2部)－自立と自己の存在の意味を求めての闘い、東京女子医科大学看護学部紀要、5:17-26, 2003。